P29-01　退院後の生活から回復期での実践課題を考える―退院後に生活機能が予測に反して向上した一症例―

中山　果美、佐藤　穂菜美、桑原　和音、衞藤　有希、立丸　允啓、小泉　幸毅
小倉リハビリテーション病院　臨床サービス部

【目的】
退院後の生活機能が予測に反して向上した要因を整理し、回復期での実践課題を考察すること。
【症例・経過の概要】
心原性脳塞栓症・左片麻痺の 70 歳代女性。病前は夫と 2 人暮らし、他人に気を遣う性格、夫との外食や買物が楽しみ。当院回復期入院時は劣位半球症状、Br.stage2-2-3 に加えて肺炎等による廃用（起立性低血圧・褥瘡・拘縮等）を認めた。入院～2 ヶ月は不明熱・関節痛を繰り返し臥床中心の生活であったが、リハ意欲は高かった。その後は活動水準の改善に伴って退院支援を実施したが転倒を繰り返し、「夫の負担を減らしたい」思いで 5 ヶ月間入院リハを続けたものの ADL 自立には至らず、歩行での ADL 見守り～介助で退院となった。退院 1 ヶ月後は退院時の予測に反して健康状態が安定しておりかつ偶発的な転倒 1 回のみで、排泄・居室内歩行自立、車いすで洗濯・外食再開、「まだ歩けるようになる」との意志が強かった。退院 6 ヶ月後は浴槽での介助浴が開始され、役割・趣味活動（留守番、買物等）も拡充していた。
【考察】
退院 1 ヶ月後には、健康状態悪化・複数回転倒を回避できており退院時の予測に反して生活機能が安定していた。退院 6 ヶ月後はさらに向上し、本人の回復への強い意志等が影響したと推察された。本症例では安全な生活の確保と本人の意志が尊重された結果、退院後も生活機能が向上しており、これらは回復期での退院支援において大切な視点であると再確認できた。